

理解領域から表現領域へつなげる授業の工夫

～「理解するために書く」から「表現するために書く」へ～

川俣町立川俣中学校 教諭 菅野美由里

1 研究の趣旨

生徒たちの実態を、各テストやアンケート、授業の様子等で調べてみた結果、本校の生徒たちは「漢字が正しく読み書きできない」「文章を正確に読み取って理解・解釈し、それに対する自分自身の意見を述べる力（読解表現力）が不十分である」「語彙が少ない」等の問題点があることがわかった。また、新学習指導要領では、「実生活で生きて働く国語力」を身につけさせるため、「言語活動の充実」が重要視され、「言語活動を通して指導事項を指導する」ことが一層明確にされた。

そこで「理解するために書く（文章の内容理解）」「考えを深めるために書く（文章の解釈）」「伝えるために書く（文章内容を踏まえた自己表現）」の3ステップの「書く活動」を取り入れ、目に見えない思考・判断を、見える形（可視化）にする学習活動を取り入れることにした。また、3つの「書く活動」を結びつけるため、「単元を貫く言語活動」を位置付け、学習自体に「目的意識」「相手意識」を持たせる工夫をしてみた。

これらの問題点や教育の今日的課題を踏まえたうえで、以下のような仮説を設定し、本主題にせまることにした。

思考の過程を言語で表すことを重視し、理解と表現を結びつけた言語活動を取り入れることにより、思考力・判断力・表現力・問題解決能力が豊かな生徒が育まれるであろう。

2 研究の概要

仮説を検証するために、以下の「3つの視点と10の手だて」を取り入れることにした。

(1) 視点1：思考の過程を言語で表すことを重視する

① 根拠にこだわった読み取りの徹底

○ 文学的文章における作品分析・解釈の工夫、説明的文章における構成や論の流れの説明

② ノート指導を徹底し、ノートを使って自らの思考の流れを整理することができるようにする

○ ノート検定の実施

③ 各ステップごとに、自らの思考の流れを整理・把握できるような「書く活動」を取り入れる

○ 指導案中の「学習課題と研究主題の関わり」で、書く活動を明記

④ 生徒同士が考え、試行錯誤し合う活動の実施

○ お互いに編集・推敲し合ったり、文章を練り上げる活動を取り入れる

(2) 視点2：単元を貫く言語活動を位置付ける

⑤ 導入の段階から「単元を貫く言語活動」を位置付け、学習に目的意識・相手意識を持たせる

○ 発表・案内・報告・編集・鑑賞・批評などの言語活動の実施

⑥ 語句の意味や内容の正確な理解

○ 語句の意味調べ、漢字練習等基礎基本の定着を徹底させる

⑦ 文章を読み、表現の特徴や優れた点について、自分の考えを持つ

○ 詞華集（アンソロジー）の作成

(3) 視点3：生徒同士が学び合い、高め合える活動を取り入れる

⑧ 生徒同士が学び合う場を多く設定する

○ 「確かめ合いタイム」「学び合いタイム」「高め合いタイム」の実施

⑨ 優れた文学作品や生徒作品の紹介と掲示

○ 優れた生徒作品の廊下掲示、授業での紹介、条件作文における優秀作文の分析等

⑩ 友人同士による「古文暗唱テスト」の実施

○ 「古文暗唱カード（6ステップでゴール達成）」の活用

3 成果と今後の課題（成果→○ 課題→●）

(1) 視点1：思考の過程を言語で表すことを重視する

○ 「作品分析表」を使用した結果、本文にしっかり根拠を求めた読み取りができるようになってきた。

○ 「ノート検定」を実施し、ノート指導に力を入れることで、自らの思考の流れをきちんと言葉で整理することができる生徒が増えてきた。

(2) 視点2：単元を貫く言語活動を位置付ける

○ 様々な言語活動を行うことにより、教材文をただ理解するだけでなく、それを活用していく力を身につけさせることができた。また、学習自体に目的意識・相手意識を持たせることにより、生徒の学習意欲や関心を高めることができた。

● 自己表現力はついてきているものの、その支えとなる基礎知識や語彙力がまだまだ乏しい。

(3) 視点3：生徒同士が学び合い、高め合える活動を取り入れる

○ 生徒同士が学び合い高め合う活動を入れることにより、生徒の学習意欲を高め、「伝え合う力」を育むことができた。

● 交流活動を行う際は、自分からは積極的に交流し合えない生徒への対応を考え、教師の方で声かけや助言をしていく必要がある。